

平成21年秋季特別展

葵と菊

～越前の名刀工・康継と国清～

●会場 企画展示室
●会期 平成21年10月16日（金）～11月23日（月・祝）

越前福井はその名を「北庄」といった慶長の頃より、江戸・京・大坂といった大都市とともに数多くの刀工の本拠となり、後の世に「越前新刀」と呼ばれるようになる刀を世におくり出しました。

初代康継・初代国清は中でも双壁といわれる名刀工であり、時の権力者達の支援も得ながら、一方は葵、一方は菊の紋を刀の茎に切り、数々の傑作を今の世に遺しています。またお抱え工としての彼らの系譜は、江戸時代を通じて連綿と連なってゆき、そこにはさまざまなドラマも生まれました。

かつてこの地から開いた絢爛な美術工芸の華の一つとして、彼らの作品の美を堪能いただき、さらに歴史の表舞台に見え隠れする彼らの活躍に注目いただければ幸いです。

Prologue. 「御紋康継」と「山城守菊国清」

「両御所様」（徳川家康・秀忠）より「康」の字と葵紋を賜った初代康継と、朝廷より山城守を賜り菊紋を切った初代国清。「越前新刀の双壁」とうたわれる二人の代表作を紹介します。



重要美術品 脇指 銘 （葵紋）於武州江戸越前康継
以南蠻鐵末世宝二胴本多五郎右衛門所持 （個人蔵）



重要美術品 刀 銘 鍛南蠻鐵剣之寛永二十一年二月日
（菊紋）山城守藤原国清 （個人蔵）

壱 刀工・康継の生い立ち

近江国下坂（現滋賀県長浜市）の出身といわれる康継は、その初期には「肥後大掾藤原下坂」を名乗り、越前に移住して間もなく結城秀康のお抱えとなったと伝わります。

さらに「両御所様」（徳川家康・秀忠父子）により江戸に召出され、「康」の字を賜って康継と名乗り、葵紋を自身の作刀に切ることを許されました。これは当時の刀工としては破格の待遇であり、おそらくその技量とともに彼が「下坂鍛冶」と呼ばれる大規模な鍛冶集団の棟梁的存在であったことが注目されたのであろうといわれています。そしてそのきっかけを作ったのはおそらく結城秀康、あるいは本多飛騨守など福井藩の有力者で、刀工「康継」の誕生に大きく関わったものと思われます。



結城秀康像（部分）
（運正寺蔵）

左：重要刀剣 刀 銘 肥後大掾藤原下坂
越前住 （部分）
（個人蔵・大阪歴史博物館寄託）

貳 古名刀の再生と写し物

初代康継の大きな面目躍如となったのが、慶長20年（1615）、大坂夏の陣で炎上した大坂城からもたらされた焼身（^{やけみ}熱を受けて刃文が無くなった状態）の古名刀を再刃（^{さいじん}再び焼入れして刃文を付け直す）し、またそれらの写し物を制作したことです。

これら再刃や写し物の多くは、原資料の単なる再現・複製にとどまらず、康継独自の造形感覚を発揮した作品であり、そのことが康継の評価を高めることになったのでしょう。

右：重要刀剣 短刀 銘 なんはんかね 三条こかち 迫
越前国康継本多飛驒守所持内
（大泉麻理子氏蔵・刀剣博物館寄託）

この短刀はもと足利將軍家の重宝で、大坂夏の陣で焼身となってしまった名物「海老名小鍛冶」の写し物。三条こかち（小鍛冶）とは原作者である平安時代の名工・宗近のこと。「三条こかち迫」の銘が康継の自信をうかがわせる。



参 その後の康継

康継、すなわち下坂家の系譜は初代没後も続き、二代康継（康悦）も父にならぶ名手とうたわれています。二代没後は越前と江戸の二つの下坂家が分立し、それぞれ越前松平家、幕府のお抱え刀工として幕末まで続いてゆきますが、「両御所様」から賜った「康継」の名と葵紋の使用という恩典が、初代一代のみならず代々引き継がれていくのは刀工への待遇としては他に例が無く、破格のものといえます。



特別重要刀剣 刀 銘 以南蠻鐵於武州江戸越前康継
ふしひきし
（福井県立歴史博物館蔵）

2代康継の傑作。茎裏の「ふしひきし（富士低し）」の銘が、この刀の出来への大きな自信をうかがわせる。



（四） 二 菊紋 山城守藤原国清

福井藩祖結城秀康二男・松平忠昌のお抱えとなり、主君の移封に伴い福井へやってきたという初代国清。彼は朝廷より山城守の受領銘を拝領し、端正な十六弁の菊紋を茎に切りました。康継とは対照的ともいえる直刃の優美な作風を基本に、傑作を多く遺しています。後を継いだ二代国清（実際の系譜上では三代）も名人とうたわれ、数々の逸話を遺しています。

彼の系譜は康継を祖とする下坂家と肩を並べ、士分に準ずる家として幕末に至るまで連綿と続きました。



太刀 銘 （菊紋）山城守藤原国清 附・蠟色塗糸巻太刀拵
（平泉寺 白山神社蔵） 四代藩主光通による奉納刀。



松平忠昌像（部分）
（運正寺蔵）

伍 刀工とともに活躍した名工たち

刀は刀工のみの力では完成することはできません。研ぎはもちろんのこと、刀身の彫物、鞘や鐔、その他数々の刀装具など、外装を含めた一口の刀は、多数の職人の技術の結晶ともいえるものです。

ここでは主に刀装具について、福井において刀工たちとともに活躍した職人を紹介します。

右：石目地塗葵紋散半太刀大小拵（福井市春嶽公記念文庫 当館蔵）

独特の形状をもつ拵で、福井藩特有のものである可能性が高いことから、「越前拵」と結論づけたもの。大きな特徴としてあげられるのは、頭や縁の部分が腰高で魚々子をかいており、特に頭は大きく張り、葵紋を透かして彫る、という点。

おそらく藩工の明珍吉久が独自の型を作ったのではないかと考えられる。

因みに幕末の藩主・松平春嶽の壮年期の肖像写真で左手に持っているのはこの大刀である。



松平春嶽肖像写真
（福井市春嶽公記念文庫）

用語解説

刀は武器として生まれましたが、同時にその美しさが人を魅了する、すぐれた美術品でもあります。

そんな美術品としての刀を鑑賞する際には、いろいろなポイントがあり、またそれを説明するのに耳慣れない専門的な用語もよく使われています。ちょっとむずかしいなと思うかもしれませんが、ここではそんな刀のみどころ、用語について簡単にご紹介しましょう。

日本刀の分類

日本刀には、形や長さによって太刀、刀、脇指、短刀といった種類があります。

また、広い意味では、槍やなぎなた、剣なども、同様に日本固有の製法でつくられたものとして、その範疇に入ります。

【太刀】みなさんが美術館・博物館でご覧になるとき、刃を下にして飾ってあるのが太刀で、平安時代末期から室町時代の初めころまで、腰につるして用いたものです。反りがきつく、刃の部分の長さはふつう65～75cmくらいあります。

【刀】太刀にかわって室町時代中頃から用いられ、長さは太刀よりもやや短いものが多いです。太刀とは逆に、刃を上にして腰に指します。刀掛けに置く時も刃を上にして置きます。もとは太刀として作られたものも、茎の部分をやすりで削って短くする（磨上という）ことにより、刀として用いられました。

【脇指】刃の部分の長さが1尺（30.3cm）以上2尺以下のもので、刀と同じく腰に指します。桃山～江戸時代には「大小」といって、刀と一緒に用いられました。

【短刀】長さが一尺未満のもので、「腰刀」とも呼ばれます。

造込み

造込みとは、刀の構造を立体的に言い表したものです。

平造り、鑄造り、切刃造り、両刃造りなど、いろいろな種類があります。

鍛え

日本刀は「折れず、曲がらず」という条件を満たすために、炭素量の少ない心鉄（しんがね＝軟らかい鉄）を炭素量の多い皮鉄（かわがね＝硬い鉄）で包んで鍛造します。皮鉄は良質の玉鋼を用い、8～15回ぐらい折り返して鍛錬されます。「鍛え」とは地がねのことで、鋼そのものの材質と、その鋼を折り返し鍛錬することによって現れて見える肌目の模様を総合したものを言います。鍛え目がはっきり出ているものを「肌立つ」と言い、鍛え目が細く密着しているものを「肌がつむ」と言います。

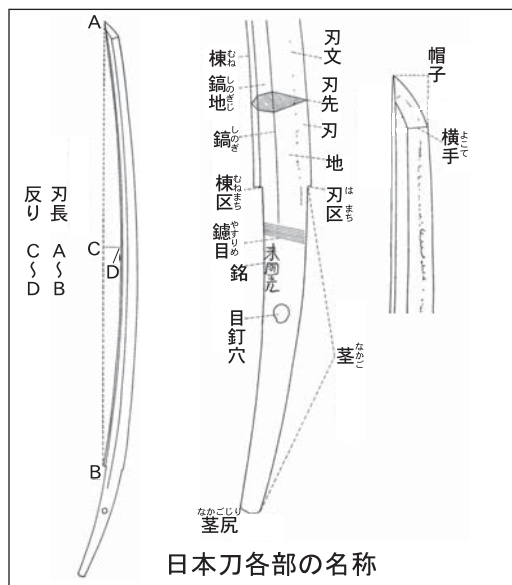
鍛えの肌に樹木の肌模様と同じ紋様が見られるのはとても興味深いところです。

それらには大別して「板目肌」「杢目肌」「柾目肌」「綾杉肌」などがあります。

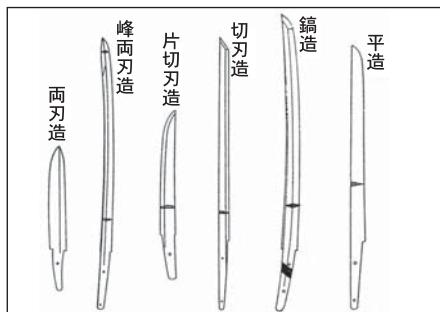
沸と匂

焼入れを行うと、刃の部分と地の部分に、それぞれの硬さの差によって刃文が生じますが、刃文と地の境目などに「沸」や「匂」が現れます。

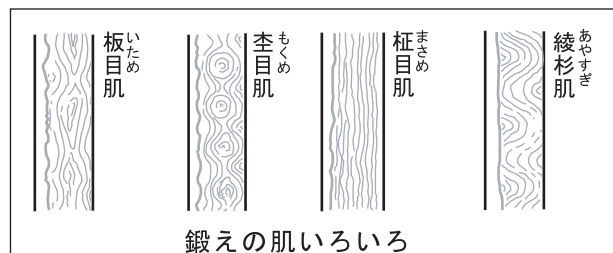
沸は粒子の粗い部分で、肉眼でとらえることができますが、匂は顕微鏡で見てやっとわかるほど粒子が細かいものです。例えば、夜空に輝く星のようにきらきらと光って見えるものが沸であり、天の川のようにぼうっと霞んで見えるのが匂であると云えます。



日本刀各部の名称



造込みいろいろ



鍛えの肌いろいろ

「働き」とは、地肌や刃中に動きや変化のあることを言います。焼き刃の働きはその形状によって、足・逆足・葉・砂流し・掃掛け・打のけ・金筋などと表現します。例えば、刃中の沸がつながって細い線となり、いっそう輝いてきらりと光って見えるものを金筋、やや太く長いものを稲妻と呼んでいます

日本刀の美と言えば、姿や鍛え肌とともに「刃文」の美しさを挙げなければなりません。刃文とは、焼入れの技術によって生ずる模様のことです。焼刃土という粘土性のものを荒仕上げした刀身にへらを用いて薄く塗るのですが、塗り方で直刃になったり、乱刃になったりと、刃文の形が決まります。これを土取と言います。土取の土が乾いたところで炉に入れ、刀身の焼加減を見て水槽に入れます。これを焼入れと言い、最も技量を要する大切なものと言われています。



	瀟亂刃 とららんば
	数珠刃 じゆずは
	三本杉 さんぽんすぎ
	箱刃 はしりば
	のたれ
	皆焼 ひたけ
	互の目
	蛙子丁字 かわすこぢょうじ
	逆丁字 さかぢょうじ
	直刃調に小互の目 すへは こへめ
	直刃調に小互の目

南蛮鉄とは、慶長年間頃から南蛮船により海外からもたらされた鉄素材のことです。東南アジア産とされるこの鉄は、和鋼と比較しても決して良質とはいえず、むしろ作刀には適さないものだったようですが、当時は舶来の珍奇な品としてかなり高価な素材であり、大名への献上品としても用いられたようです。身分の低い刀工が直接入手して安易に使用できる素材ではなく、当時南蛮鉄を使用した刀工は康継・国清を含めいずれも大名お抱えの刀工でした。

ちなみに康継はこの南蛮鉄を作刀に使用した日本で初めての刀工であると言われています。家康・秀忠に召し出され「康継」と改名する以前の刀には「以南蛮鉄」の銘がないことから、初めて南蛮鉄を使用して作刀したのは、この家康・秀忠に召し出された際にはなかったかという説もあります。

このように、「南蛮鉄」という銘には、単に外国産の鉄を使用したということを明示するだけでなく、当時希少な材料を使用したという特権意識や、作刀の素材として扱いの難しいものを使いこなしたという自負がこめられている、と考えることができます。



左：康継の作刀に見られる「以南蛮鉄…」の銘
右：国清の作刀に見られる「鍛南蛮鉄…」の銘

刀剣を携帯し、使用しやすくするための付属装置全体を刀装と言い、その部品を刀装具と言います。各分野の工匠の、高度な技術が結集しています。拵とは、刀装の形式のことです。太刀拵と打刀拵とがありますが、両者は帯佩着用^{たはいけりよう}に違いがあり、刀装部位の同じ所でも、時代別、種別で便宜的に名称を区別しています。

日刀保福井支部会員による解説

日時：平成21年11月3日（祝）
午後2時～3時
場所：当館2階 講堂
演題：「郷土の名工・康継と国清」
講師：森 弘次氏
（（財）日本美術刀剣保存協会福井支部長）

(日本刀の研磨・鞘制作の実演)

日時：平成21年11月7日（土）
午前11時～12時
午後2時～3時

場所：当館2階 講堂

研磨実演：藤川二朗氏
刀装実演：勝山捷容（一捷）氏

会期中、(財)日本美術刀剣保存協会福井支部の会員有志が展示室内に常駐します(午前10時～午後5時頃まで)。刀剣に関するご質問があればお気軽に声をおかけください。

展示解説シートNo.46 平成21年10月16日発行
福井市立郷土歴史博物館
福井市宝永3-12-1 電話 0776-21-0489
Fax 0776-21-1489

担当：松村知也

制作/白崎印刷(株)